
君の踏み出すその一歩

zzZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の踏み出すその一歩

【Nコード】

N6559P

【作者名】

ZZZ

【あらすじ】

一歩。

何も考えずに踏み出す一歩は簡単に足が前に進む。

じゃあ、大事なことを決めるときの一歩は？

足踏みしたり、一歩下がってみてもいい。

ただ、最後には、あなたが前へと進めますように…

足を踏み出すその前に

寒い。

屋上へと続くドアノブに手をかけた時、一瞬外に出るのを躊躇ったけど、結局私はドアを開けていた。外へ出てからまだ二歩ぐらい進んだだけなのに、引き返したくなる。校内に暖房があるという訳でもないが、この風にあたるのとあたらないのでは明白な違いがあるのだろう。

それでも私は歩いた。理由は…夕日が見たかったから。放課後の誰も近寄らないこの屋上の風景を目に焼き付けておきたかった。すばらしく、きれいだと思っていた。ドアを開けてすぐに飛び込んでくる赤、朱、黄色の温かい彩りは、私になによりも好きな色。その色に、私も溶け込むようにと、一步、二歩と、私は夕日に近づいて行く。そしてあと一步で夕日に溶け込める。と、思った時だった。

「…ねえ、君」

無遠慮な声が背後から響いて私は一気に現実へと引き戻された。夕日へと伸ばした最後の一步をゆっくりと下げる。

「何か…用ですか？」

振りかえる事もせず、俯きながら自分なりに冷たく突き放した一言を声の主にぶつけた。

「用…か。大した事じゃないんだけどさ、鍋、好きか？」

「…はあ？」

意外すぎるその言葉に、私は不覚にも振りかえってしまっていた。…そしてそこには、異様な光景が広がっていた。屋上の片隅で、コタツに入ってぐつぐつと煮える鍋を囲む男子生徒が1人。

「いや、説明不足だったか、鍋って言ってもキムチ鍋なんだけどな」
彼は頭をポリポリと掻きながら、照れくさそうに笑った。

「べ、別に鍋の説明なんて求めてませんから！！！！…ていうか、何で学校にコタツと鍋があるんですか！！！！…そして何故鍋に微笑む！！！！？」

「鍋に微笑んで何が悪いか！！！！…まあ、細かい説明をすると、きれいな夕日を見ながらの鍋を食べるといふ本来の目的が達成出来なくなるからパス。…とりあえずこっちに来て座りなよ。そんな所に居たら、寒いつしょ？」

確かに寒い。でも今の私には、その温かな場所に足を踏み入れるのがとても怖かった。

「わ、私は」「少なくとも」

喋ろうとした私を遮る彼の口調は厳しかった。びくつと肩が上が
り、私は立ち尽くした。彼はしばらく私を見据えた後に、優しく微笑んで続く言葉を発した。

「少なくとも…君が行こうとした『その場所』なんかよりは、ここの方が温かい」

彼が『その場所』と言って指差した先は、私があと一歩踏み出せ

ば行けるはずだった場所、屋上から地上へと続けた。

絶壁があ

彼の顔を見たとき、目頭が熱くなった。涙は溢れて、止まることなく、頬を濡らした。私は足の向きを変え、よろよると彼の元へと向かった。コタツの中に足を入れると、何ともいえない温もりが私を暖めた。

「温かい……」

私がポツリと呟いた一言に「だろ？」と答える彼は少し得意げだった。そして彼の顔は、夕日に染まって少しだけ、赤く見えた。

足を踏み出すその前に（後書き）

なんというか、完結しちゃった感が…

読んでくださった方はありがとうございます。

これからも続くので、よければお付き合いください…

先輩方と私

ぐつぐつと音を立てて煮える鍋は、私の食欲をそそった。鍋の蓋の合い間を縫って香る鍋の匂いはなんともおいしそうな匂いを放っている。

あ、そういえば朝からまともに食事を取っていなかった気がする。私は鍋を前にしてのんきにそんな事を考えていた。

ぐつぐつ。

しまった！！そう思った瞬間にサツとお腹をおさえた。だが、鳴ってしまったものは隠しようがない。恐る恐る顔を上げてみると、案の定、彼はニヤニヤと笑っていた。

「な…なにか問題がございますでしょうか！？」

そして私はやけくそになった。

「い、いやあ、別に何でもないよ？…それよりごめんね？もうできてるんだけどさ、まだ集まってないから、もうちょっと待ってね？…ぶふっ！！」

…笑い声が漏れてますけど。今も必死に堪えながら笑っている彼に、本当はそう言いたかったけれど、それを言ったら話が展開してしまう気がして、私はグツと言葉を飲み込んで、話を逸らした。

「えっと、誰かを呼んでたんですか？もしそうだったら私お邪魔なんじゃないですか？」

すると彼は、少し驚いた顔をして、

「あれ？言ってなかったっけ？」「聞いてませんよ！！！」

当然言つてあつたかのような口ぶりで私に告げた。

「怒るなよ。でも、まあ君がいて邪魔になるなんてことはないから安心していいよ。…それに、今君をどっかにほっぽらかしてさっきみたいなき事を別の場所でされると困るしね…」

ギクリと体が縮こまった。

「そ、それは」「100%ありえないって言える？…何で君があんな事をしようとしたかわかんないけどさ、そこまで君を追い詰める『何か』があつて、覚悟を決めてあそこに立っていた訳でしょ？少なくとも、こんなただの通りすがりの生徒に一回止められただけで、解決するような問題だったとは俺には思えないけどな」

無言。

彼と私の間に、気まずい空気が流れた。それはほんの数秒だったかもしれないし、もしかしたらとてつもなく長い時間だったかもしれない。鍋の音がほんの少し聞こえた気がするけれど、それも定かではなかった。

…私は言葉を発することが出来なかった。彼の言った言葉を、私は何一つ否定する事が出来ない。直感とかそういう類のものではなくて…揺ぎ無い事実だったから。私が今日ここに来たのは本来鍋を囲うためとか、誰かと話をしに来た。そんな理由ではない。短い自分の人生に、終止符を打ちに来たのだ。彼に偶然止められただけで…私の根本は何一つとして解決などしていない。

「…おつ。来たみたいだな」

はつとなつて顔を上げると、確かに屋内に続く階段の方から足音と話し声が聞こえてきた。その足音はだんだんと近づいてきて、数秒後に、二人の男子生徒と一人の女生徒がやってきた。

「うっわ…。マジでやってるよ。ユキ、なんでこいつってここまで馬鹿なの？」

お洒落な眼鏡をかけた男子生徒の一人が、女生徒に話しかける。

「あたしに聞かないでよ。桃矢の馬鹿度なんて、あたしには計り知れないんだから」

女生徒は、若干イライラした様子で彼を睨んでいた。そんな女生徒を、私は美人だなあと思っただけで見ていた。艶やかに腰の辺りまで伸びたロングヘア、真っ黒な髪と対照的に白くきれいな肌。可愛らしい目元。自分と同じ日本人だとは思えなかった。

「…っか、桃矢。こいつ誰だよ」

ユキと呼ばれていた女生徒に見蕩れていると、いつの間にか私の前に座っていた不良っぽい生徒に顎でこいつと言われていた。

「あ、ほんとだ。はじめて見る子だね？…君は一年生？桃矢、この子誰？」

さっきまで何かを言い合っていた眼鏡と美女の二人も、私に気づいて話しかけてきた。

「えっと、多分二年校舎では見たことないから一年生の…あ、名前聞いてなかった。君、名前は？」

「あ、そういえば。すみません挨拶もしてなくて…。私、一年五組の川瀬 里奈って言います。よろしくお願いします」

話を聞いていて、彼らが先輩であることをなんとなく察した私は、敬語で自己紹介をした。

「川瀬 里奈ちゃんだって」

「だって。じゃないわよ！！この子どもからさらって来たのよ」

…あつ。まずいと私は思った。ここに来て、ここから飛び降りようとしていたと知ったら彼らはどんな反応をするのだろうか。やっぱり軽蔑されるかな？それとも同情されるんだろうか

「さらうって…お前らが遅いからたまたま屋上に来た里奈ちゃんを鍋パーティーにお呼びしただけだよ！」

…えっ？ああそうか。言えるわけないか。自殺しようとしていた女の子を助けて、死なれると困るから呼んだなんて。でも、そんな嘘、ばれるに決まっている。今日は卒業式だったのだ。普通の一年生は家庭学習という名目の休日なのだから。

「…ふうん。まあいいわ。人数は多いほうが楽しいしね」

ユキ先輩は、それだけ言うと私に笑いかけて私の隣に座った。

「あの、先輩方って…生徒会の人なんですか？」

全員びっくりした表情をしたあと、視線を桃矢先輩に向けた。桃矢先輩は、ポリポリと頬を掻きながら苦笑いをして、言った。

「あ、あれ？言ってなか

」 「聞いてませんよ！！！！！！」

先輩方と私（後書き）

人数が増えるのごちゃごちゃしちゃって書きにくくなるのは自分だけでしょうか…。今日の夜中に中途半端なまま投稿してしまうという事件をおこしてしまいました。見ていらっしやっただ方は少ないとは思いますがお詫び申し上げます。これからも続きますのでお暇な時間にも、目を通して頂けると幸いです^^

桃太郎生徒会

「乾 莞爾と掛けまして、この、白滝と解きます」「その心は？」

「桃矢先輩が立ち上がり、のんきに謎掛けをしている。」

「どちらもアク（悪）が強いでしょう」「…殺す」

ぎゃあぎゃああと騒がしい喧騒の中。私は…ただ、縮こまって成り行きを見守っている。あれから先輩たちも私に簡単な自己紹介をしてくれた。

「じよっ…冗談だから…離して…」

今首を絞められて顔を真っ青にしているのが、生徒会長、藤巻 桃矢先輩。

「……」

そして表情を変えずに桃矢先輩の首を絞める不良っぽい先輩が、生徒会書記、乾 莞爾先輩。

「あ、この豚肉ウマイ」

我関せずといった感じに箸をすすめているのが、生徒会会計、猿渡 誠二先輩。

「はあ…。ちよっと莞爾、いい加減にしないとマジで桃矢死ぬわよ」

そして、首を絞めている莞爾先輩を止めに入った美人な先輩は、生徒会副会長、朝井 雪路先輩。

どの先輩も少し話しただけなのに、クセの強い先輩ばかりで私の心は挫けそうなのに、その上先輩たちが、『あの』生徒会の主要メンバーだと知った私は、ただ縮こまることしか出来なかった。

五洋学園高等学校。私や先輩たちが通う高校の名前だ。五洋学園という学校は、元は五つの学校だった。北洋学園、西洋学園、南洋学園、東洋学園、真洋学園。それぞれの学校が統廃合を繰り返した結果、県内最大の学園となっている大きな学校だ。生徒総数2500人超。進学率もずば抜けて良い反面、不良や問題児も多く集まる何かと注目の集まる学校である。その問題児や特進クラス優等生に一目置かれ、この人ならばといった2500人の頂点的な存在が五洋学園の生徒会役員として選ばれるのだ。そんなただでさえ普通じゃない先輩たちと、私のようなギリギリでこの学校に入学出来た私と同じ鍋を囲むという非常事態のなかで普通に振舞うことなど不可能だ。

「里奈ちゃん、どうかしたの？」

縮こまった私を気遣ってくれたのか、ユキ先輩が私に話しかける。

「いえ、なんだか居心地悪くって…」

私はユキ先輩だけに聞こえるように小さな声でそう言った。

「あれ？里奈ちゃんは鍋嫌い？」

「いえ、お鍋はとってもおいしいです。そうじゃなくて、その…皆さんが生徒会の偉い人だつて知らなくて…」

ははつと乾いた笑いを浮かべながら、ユキ先輩に言うと、

「あら？そんな事？」

ユキ先輩は拍子抜けしたかのように優しく笑った。

「あんまり私たちが生徒会だからって特別な目で見なくて良いのよ？生徒会役員つて言つたつてみんなと同じ生徒であることには変わらないんだし、何より、一般の生徒にそんな人間じゃないくみみたいな目で見られてしまうほうがあたしたちにとっては悲しいかな」

あつ…そうか。確かにそうかもしれない。私はなんて失礼なことを思っていたのだろうか。確かに生徒会役員に選ばれる人間は、私から見たらとても遠い存在であることには変わりないが、彼らも五洋学園の生徒なのだ。私と同じ道を歩いて登校し、私と同じグラウンドで運動をして、私と同じ学び舎で勉強をする。そんな私とあまり変わらない日々を過ごす生徒を、生徒会役員だからと、一括りにしてしまった私を、私は恥じた。

「その通りだとも！！里奈ちゃんが遠慮することは何もないさ！僕たち桃太郎生徒会は、生徒との意思疎通がこの学園を良くしていくと常々考えているのだから！！」

「桃矢先輩…聞いてたんですか…」

いつの間にか話に加わってきた桃矢先輩は、明らかにオーバーなリアクションで私に言う。ユキ先輩はそんな桃矢先輩を見て、頭を

抱えていた。そんなユキ先輩を見て、桃矢先輩のお守りつて大変な
んだらうなあ…などと思いながら、疑問に思った事を口にした。

「えっと…桃太郎生徒会って何ですか？」

聞いてくるのを待ってましたと言わんばかりに、えへんと胸を張
って語りだした。

「桃太郎生徒会って言うのは、俺が考えた来年度の生徒会の名称さ」

「いや、それが何で桃太郎なんですか？」

「それは、みんなの名前を見ればなんとなく分かるんじゃないかな
？」

桃矢先輩はそう言って、胸ポケットから、ボールペンと一枚のメ
モ用紙を取り出して、楽しそうに何かをさらさらと書いていく。

藤巻 『桃』 矢、『イヌ』 イ 莞爾、『猿』 渡 誠二、朝

井 ヌ『キジ』

「ああ、なるほど！！…ってダジャレですか」

全員の名前が書かれた一枚のメモ用紙。それぞれの名前のなかに
キーワードがあった。確かに桃太郎に出てくるものにちなんではい
る。

「それ、僕たちは認めてないけどね」

眼鏡を湯気で曇らせながら、食べる手を止めずに猿渡先輩は言っ

た。ユキ先輩と乾先輩も頷いている。

「結構お気に入りなのに……」

桃矢先輩はというとさっきのハイテンションは見る影もなくあからさまにしょぼくれている。

「え、え〜と、私はいいと思いますよ……？なんていうか……ゆ、ユニークで……！」

さっきひどいことを思ってしまったし、罪滅ぼしのつもりで私は精一杯桃矢先輩をフォローしてみた。

「そくだよね！いやあ〜新しいメンバーにそう思ってもらえると、こっちも嬉しいなあ」

「……………えっ？」

私の聞き間違いだろうか。明らかに桃矢先輩の声であり得ない発言を聞いてしまった気がする。

「えっと、今なんて仰いましたのでしょうか？」

「え、結構お気に入りなのに」「その後ですよ！」

わざと言っている。桃矢先輩は私をからかって遊んでいた。

「新しいメンバーにそう思ってもらえると、こっちも嬉しいなあ」「それです……！」

「新しいメンバーって何のことですか！」

「桃太郎生徒会のニューフェイス。里奈ちゃんの事だけだ」

あり得ない…。この人はやはり異常だ。罪滅ぼしなんて事を考え
たさっきの私を止めに行きたい。いや、生徒会役員云々の件から全
ての私を止めに行きたい。

「じよっ…冗談は止めてくださいよ！！私は…私は先輩方とは違
うんです！！ただの一般生徒だし、生徒会の皆さんみたいに人望
もない！頭の良さもない！運動も人並みにしか出来なくて…そんな
私に…生徒会役員なんて務まるわけないじゃないですか…！！！」

自分のなかの、何かが爆発した。怒りなのか…いや、妬みかもし
れない。自分にはないものを持っていて、自由奔放に動き回る先輩が、
羨ましくて妬ましい。それは…私が欲しくて欲しくて堪らないもの。
温かな居場所と、気心知れた友達。ある人には当たり前にあつて、
ない人にはなかなか手に入れないもの。

「悪いけど、拒否権はないよ。俺が決めたんだから」

「そんな…っ！！」

桃矢先輩の目が、私を止めた時のあの目になっていた。なんと
なく、私は理解した。この人は、私を死なせないつもりだ。彼は私か
ら目を離れたら、私が死ぬと思っっているんだ。そうか、同情か…。
そう思っただ途端に私の心はひどく冷え切った。

「…もう、あんなことしませんから…。先輩も余計な気持ち抱か
ないでください…」

激昂から沈静へ。フラフラした足取りで校内へ続く階段に向かって歩き出す。

「…んなよ」

桃矢先輩が何かを呟いたが、私は足を止めなかった。次の瞬間、

「おい、逃げんなよ！川瀬 里奈っ！！！」

先輩の大声が空に響いた。私は、その声にたじろぎ、足を止めてしまった。

「もう、逃げんのは…止めましょう」

桃矢先輩は、一呼吸入れてから話し出す。私は…その場で立ち尽くした。

「君は何から逃げてるの？なにがそこまで君を追い詰めるんだよ」

「そんなの…先輩には関係ないじゃないですか！！！」

ひどく心は荒んでいく。先輩の一言は、私には重くって聞いているのが怖かった。

「…関係なくない」

「そんなの…きれいごとです！世の中は…先輩のように順風満帆な人間には程遠いところで、肩身を狭くして生きていく人間だっているんですよ！！！」

そう。私は先輩のようにはなれない。

「…なんで？何でそんなことがお前に分かるのさ」

先輩は私の前に立ちほだかり、私の目をまっすぐと見据える。

「私が…そういう人間だからです」

私はそのまっすぐな目を睨み返す。桃矢先輩は少しだけ寂しそうな顔をしたが、すぐにその顔は影を潜めてとても怖い顔に逆戻りした。

「…謝れ」「…えっ？」

意味が分からない。私がそういう人間だという事を誰に謝らなければいけないのか。

「いますぐにだ」「…何をですか」

「何かを変えようと踏ん張って、自分と戦って、そうやって一日一日に努力をしている人に、謝れよ」

「っ…！」

私は言葉に詰まってしまった。俯いてただ下を向く。

「…変わりたいんだろ？いや、変えたいのかな？」

桃矢先輩は長いため息を一度だけついて、私にそう聞いた。その

口調は、さっきとは一転して、私に優しく問いかけていた。

「…はい」

私は、ただ一言、短く答えた。

「じゃあ、一緒に変わっていこう。俺たちと一緒に」

「…はい」

私は、溜め込んだ涙を余すことなく出してしまいたくなった。先輩たちは、そんな私といっしょに、ただ黙ってそこに居てくれた。

桃太郎生徒会（後書き）

幼稚だなあ……。文章が拙くて大変申し訳ないです。書きたいことと書いていることの差があったりして、葛藤しております……。この小説で何かをコツみたいなのを掴みたいです。

任された仕事

生徒会室。一般生徒はあまり立ち入ることのないその部屋は、私が一言で言い表すと『異空間』だった。見たこともない調度品が立ち並び、置かれている家具も高級なものばかり。ここは学校の中ではなく、どこかのおしゃれな洋館の中のように感じる。

そんな空間の中で向き合う二人の生徒。一人は穏やかな表情を浮かべ、もう一人は険しい表情で私を見ている。

「昨日の始業式のことなんだが…」

私を見ていた男子生徒は、もう一人の…桃矢先輩に顔を向けて話し出した。

「彼女が新しい生徒会役員で間違いないようだね」

そう、昨日の始業式で私が正式に生徒会役員のメンバーに加わる事が全校生徒の前で発表された。ああ…思い出すだけで眩暈がする。

「そうだよ。彼女が新しく加わった生徒会の川瀬里奈ちゃん」

桃矢先輩は表情を崩すことなく彼に言う。

「生徒会長就任早々問題を起こすなんて前代未聞のことだぞ」

そんな態度を見て、彼は少しだけ口調を荒げた。

「問題？おかしな言い方は止してくれ。彼女の成績を見たんだろう

？確かに彼女は去年、五組だったけれど今年一組に上がってきてるじゃないか。実績の上での判断に問題という言い方は心外だよ」

そう。私は二年生になった時に一組に上がった。でも桃矢先輩は嘘をついている。私の実力では、この学園の一組になんて、ものすごく勉強しないと上がれる訳がない。実際は桃矢先輩が生徒会役員として一組に上がるように仕向けたのだ。入ってから知ったが、この学園の生徒会には様々な特権が認められているらしい。

「…それは認める。だが」「特待にも成果を出している者はいるって言いたいんだよね？」

自分の言おうとしていた事を先に言われてしまった彼は、少しにがい顔をしている。

「…そうだ。なぜ特待の生徒を選ばない。特に今年の生徒会役員は役者が揃っていると言ってもいい。実力と支持率は圧倒的な数値だった。演説で生徒の心を掴み、熱狂的に生徒会選挙を盛り上げる姿勢にどれだけの生徒の期待があった事か…。どれだけの生徒がこの生徒会に入りたいと思ったことか…。君はそれを裏切ると言っただね」

どこか懐かしいような目をする彼も、桃矢先輩の勇姿を見て期待したことだろう。私は居た堪れない気持ちになった。桃矢先輩がどれだけ生徒に信頼されていた事か。私が生徒会役員にいきなり選出された事にどれほど絶望したことか…。でも私も春休みを生徒会の先輩たちと過ごして、一緒に先輩たちと学園生活を良くしたいと本気で思い始めていた。

「裏切らないさ。君たちのように僕らの活動を期待してくれている

人たちに恥じない事やってみせる」

当人である桃矢先輩はいつも自信に満ち溢れている。揺るがないその態度は私に勇気と自信を少しだけ分けてくれる。

「最後に聞かせて欲しい。しつこいようだが、なぜ彼女なんだ。彼女を少しだけ調べさせてもらったが、妙なうわさがあるらしいじゃないか」

私はその言葉を聞いてビクリとした。噂はもう学年を越えているのかと思うとやはりまだ少しだけ怖い。

「噂…ね。君みたいな人間でも噂に流されるんだね」

桃矢先輩の目つきが変わった。まるで相手を威圧するかのような目で男子生徒を見る。

「いや、真実は違つかもしれないが、火のないところに煙は立たないと言っただろう?」

少したじろぎながら男子生徒は反論した。

「確かにそうかもしれないね。じゃあ…そうだな、条件をつけようか。今度の6月に行われる大運動会の生徒会派遣役員を彼女と莞爾に任せるつもりだ。そこで結果を出すことが出来なければ、彼女を生徒会役員から解任するよ」

桃矢先輩は迷うことなく言葉を発した。これは事前に言われていたことだった。「生徒からの反発が大きい場合はなにか大きな仕事を任せるかもしれない」と。男子生徒は少し悩んだそぶりを見せて

から、

「…分かった。その時に生徒からの不満が大きいようならば、彼女を解任してもらおうこと。それじゃあ、今日は失礼するよ。」

そう言い残し、私をちらりと見てから部屋を出た。

「ふ〜。いやあ緊張した」

桃矢先輩は、男子生徒が部屋を出るのを見て、大きく伸びをした。

「お疲れ様です。すみません、私が生徒会に入ったせいで先輩方に迷惑をかけてしまって…」

「いや、元々誘ったのはこっちの方だし、君がそこまで気にすることじゃないよ。それに成り行きとはいえ君を大運動会の派遣委員にしてみましたしね。ごめんね？」

桃矢先輩は申し訳なさそうに私に頭を下げた。でも私は

「いえ、これでいいんです。私が頑張れば、皆さんと一緒に生徒会活動をこれからもやっていけるなら頑張れると思いますから」

迷いはなかった。春休みは忙しい日々だった。それでも先輩たちと一緒に活動をして、単純に楽しかった。楽しいと思えたのは高校に入ってから初めてかもしれない。それだけ私の過ごした一年間は苦痛だった。

「ありがとう。こっちでもなるべくバックアップはするから頑張ろうね」

「桃矢先輩は頭を上げてニツコリと微笑んだ。

「桃矢く。ここにいろく？」

ガラガラと扉が開き、他のメンバーが入ってきた。

「あ、里奈ちゃん早いね。桃矢と二人でいやらしい事されなかった？」

猿渡先輩が軽いジョークで私をからかう。そして

「出来るわけないでしょ。桃矢にそんな度胸はないわよ」

ユキ先輩がイラつとしながら猿渡先輩を叩く。

乾先輩は何も言わずにソファに腰掛けて寝転がった。いつもの風景。馴染めなかった私を気遣うように先輩たちは思い思いに私の事を見てくれた。この場所にこれてよかったと思った。あの時もしあの一步を踏み出していたらと思うと、いまだに震えてしまう。

「あ、莞爾。来週からの大運動会派遣委員やってもらうからね？」

「…なんで俺が」

あれ？桃矢先輩は言っただけでなかったのだろうか。莞爾先輩が桃矢先輩を睨みながらソファから起き上がった。

「里奈ちゃんのフォロワーのため。誠二とかユキと一緒にだ」と里奈ちゃんの生徒会入り反対の人達は里奈ちゃんの成果として認めてくれな

さそうだから。それと…」

桃矢先輩は乾先輩に近づいて耳打ちをした。

「…ちつ。分かったよ。めんどくせえ…」

何か弱みを握られているのだろうか？乾先輩はあつというまに引き下がってまたソファに横になった。

「…あ、あのよろしくお願いします」

寝転がった乾先輩に一応挨拶をしておく。乾先輩は私を少しだけ見て「…ああ」とだけ言うとう目を閉じて何も言わなくなった。

「大丈夫だよ、莞爾は決まった仕事はしっかりやってくれるから」

ニコニコと笑う桃矢先輩だが、とてつもなく不安だ。春休みの活動の中で唯一乾先輩とはまともに会話をしたことがない。私は避けているつもりはないのだが、どうも私が話しかけようとするとな変な表情をされてしまう。怒っているような、邪魔すんなど言っているような気がして私はほとんど話したことがない。

不良のような立ち姿はきつと誰でも怖いんじゃないだろうか。ま
ず赤茶色に染まった髪。常に誰かを睨んでいるような少し釣りあが
った目。釣りあがっているのにその目が大きいためには頭一つ分乾先輩のほうが
やない。身長も他の生徒と並んだときには頭一つ分乾先輩のほうが
大きい。この前廊下を歩いているときに乾先輩が歩く道がモーゼの
十戒のように割れていくを見たりもした。

「よし、誠二、この前頼んだ部活動の予算案は出来上がった？」

桃矢先輩は用件が済むとすぐに次の仕事に取り掛かっていった。誠二先輩と何かを話しながらパソコンで作業をしていく。私は何をすることもなくその場に立ち尽くす。

「里奈ちゃん、コーヒーと紅茶どっちがいい？」

ユキ先輩が生徒会全員分のティーカップを持って私に話しかける。

「あ、私も手伝います」

仕事が見つかって少しだけ安堵した。さすがに乾先輩の目の前に立ち尽くしているのは若干辛い。乾先輩が嫌いとかそういうわけではないが、なんとなくそう思った。そしてティーポットから紅茶のいい香りが漂い始めた時、ユキ先輩が話しかけてきた。

「大きい仕事は初めてだよね？」

「はい、でもやってみせます」

私は即答した。あんなに暗かった私がこんな事を言うなんて気持ち悪かったかなと思いつながらユキ先輩の方をちらりと覗き見ると、ユキ先輩は

「私の顔を窺う必要なんかないのよ。里奈ちゃんがやるうって自主的に思えたことが、私たちにとっては嬉しいことなんだから」

と言つて優しく頭を撫でてくれた。

先輩たちはいつもそうだった。強引な勧誘から約一ヶ月が経ったが、全部を私に与えてくれたわけじゃない。助けるための手助けはしてくれるが、最終的には私にやらせる。桃矢先輩があの時「俺た

ちと一緒に」と言ったのは嘘ではなかった。私はそれが嬉しかった。全部を先輩たちがやってくれるなんていうのは私に対しての同情や哀れみとしか私には受け取れない。道を示してくれて、後は私がやれという風に私を自主的に動かしてくれると言うのは本当の意味で私を助けてくれていた。

「本当に私はこの生徒会に入れて嬉しいです」

ぎこちなく笑う私の顔には少しだけ涙が浮かんでいた。

「桃太郎生徒会だからね」

桃矢先輩が唐突に紅茶を淹れたばかりのカップを掴んでくるりと回った。

「あ、桃矢！勝手に取るな！」

追い掛け回すユキ先輩を難なくかわしながら桃矢先輩は私に話続ける。

「この生徒会は、生徒の生活を…とと、第一に考えて、自主性と個人の意欲は常に前向きに持つてもらわないと…ねっ！」

くるくると同じ場所を行ったり来たり、二人のそんな様子はダンスホールで踊る王子様とお姫様の様だった。

「あんだのは自主性って言うより自己中心でしょうが！」

ユキ先輩はとうとうあきらめて他のカップに紅茶を注ぐ。

「まあ、だから里奈ちゃんが物事に取り組もうとする姿勢はとて面白いことだよ」

桃矢先輩は飲み干した紅茶を机に置くとまた仕事に取り掛かった。

「自分で動く…か」

私はまだあまり変われてはいない。噂の誤解も解いていないし、何も解決などしていない。それでも、この人たちと一緒になら、その誤解を解く鍵が見つけれられる気がする。私はおぼろげにそう思った。

任された仕事（後書き）

年末年始って何かと忙しいですね。時間を見つけては書くこと思っていたのに、気がついたら前回の更新から随分と時間が経っていました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6559p/>

君の踏み出すその一步

2011年1月13日07時41分発行